

## 軍記物語の対称詞

永田 高志

### 一、はじめに

人が他の人と接触を行う場合には、接触する相手に応じてその態度を変化させるのが常である。言葉による対人接触を待遇表現と呼んでいる。その待遇表現の中でも、相手をどのように呼ぶかは最も重要で頻繁に現れる待遇表現である。言語学の発祥の地、西洋では英語を例にとると、「Hello Mr. James.」のように相手を「Mr. James.」と呼び注意を引く。ファースト・ネームで「John.」と呼んだり、「Dr. James.」のように敬称で呼んだり、聞き手との関係に応じて呼び方を変えていく。このような語を「terms of address」（呼称）と命名している。しかし英語においては、いったん相手の注意を引いた後では、「I haven't seen you for a long time. How are you?」のように二人称代名詞「you」で相手をさすようになる。

まさに、名詞に代わるもの「pronoun」（代名詞）である。しかし日本語の代名詞は、西洋語の代名詞とは機能が大きく異なる。話者は自分より目上の者を聞き手とする場合には、「先生、おはようございます。あなたは今どこに行くのですか」のように二人称代名詞を使わず、「先生、おはようございます。先生は今どこに行かれるのですか。」のように役割上の関係を表わす「先生」を使ったり、役割上の上下関係がない場合には「永田さんは今どこに行かれるのですか。」のように姓に敬称の「さん」を付けて呼ぶことになっている。従って、西洋語に基づいて作られた文法用語、「二人称代名詞」は日本語には不適當で、「山本、お前どこに行くんだ」の場合、呼びかける「山本」は呼称詞、いったん呼びかけた後で使われる「お前」は対称詞と呼んで区別することにする。従って、「先生、おはようございます。先生は今どこに

行かれるのですか。」の最初の「先生」は呼称詞、後の「先生」は対称詞となる。

鈴木（一九七三）では現代日本語の対称詞を調査し、世代の上下と、同世代に属するものの間では年齢の上下が目上目下を決定し、親族同士の対話では「話者（自己）は、目上目下の分割線の上に位する親族に人称代名詞を使って呼びかけたり、直接に言及することはできない。これと反対に、分割線より下の親族には、すべて人称代名詞で呼びかけたり、言及したりできる。」（一五一頁）と示している。例を挙げると、分割線の上に位する親族、例えば父親に対し、一番丁寧と考えられる二人称代名詞「あなた」を使ってさえ、「あなたはどこへいらっしゃるのですか。」とは言えないが、反対に、分割線より下の親族、例えば息子に対し、丁寧度が低い二人称代名詞「おまえ」を使って、「おまえはどこに行くんだ。」と言える。この点は、多くの社会言語学者の間では、日本語の待遇表現がいかに聞き手との年齢の上下差によって左右されるか、日本の社会構造を反映しているという点で日本語の特徴として重要であると考えられている。

しかし、これはあくまで現代日本語の共通語に当ては

まる規則で、国立国語研究所（一九七九）によると、二人称代名詞で目上の者を言及したりする方言が多く存在し、また、永田（二〇〇六）では共通語の基盤になった東京語においても明治前期には二人称代名詞で目上の者を言及するのが一般的であったことを示した。さらに、明治後期と大正期における東京語の対称詞を調べた結果、永田（二〇〇八b）で、「現在の共通語の待遇法はまだ十分定着していない。つまり、親族の上位者に対して、多くの場合親族名称が使われるが、『あなた』も同様に使われている。役割上の上位者に対して、役割名が使われることがあるが、『あなた』も同様に使われている。」（一〇八頁）と述べた。さらに、同時期に発刊された総合雑誌『太陽』で使用されている対称詞を調査した永田（二〇〇九a）でも、「役割上の、親族上の目上を役割名や親族名で待遇すべきという現在の共通語の体系は『太陽』においてもまだ十分に定着していない。」（六九頁）と結論付けた。明治後期以降、徐々に現代の体系に移行してきたことが分かる。そうになると、現代日本語の共通語の対称詞の体系はどこに起因するかが問題となる。それを追及するために国定教科書の対称詞を調べた結果、永田（二〇〇八a）では、「現代の共通語の

対称詞と同じ体系が国定教科書で使われている。むしろ、国定教科書で使われている対称詞の体系が学校教育を通じて標準語として全国に広まっていたと考えた方が順当である。」(六六頁)と述べた。さらに、国定教科書で使われている対称詞の体系は一体何を基準に作られたものであるかという問題点に及んでくる。標準語という性格のため、公式場面で使われる言語であることは自明の事実である。第一期の国定国語教科書が発行されたのは明治三六年であり、それ以前の支配者階級に根ざした公式言語であることは想像に難くない。さらに、永田(二〇〇九b)では、公式言語を探る資料として「捷解新語」を調査した。その結果武家の公式言語では、現代日本語の共通語の対称詞の体系と同じ体系が使われていると結論づけた。ここでは、さらに、武家階級が生まれ、さらに武家が公家から権力を奪い取るのは鎌倉時代であり、言語においても武家は公家の公式言語を継承したことが想像される。武家の公式言語の対称詞の体系の元を遡るために、軍記物語を調査することにする。

今まで「現代日本語の共通語の対称詞の体系」という用語を頻繁に使ってきたが、「上下(うへした) 対称詞」と今後呼ぶことにする。すなわち、年齢や地位の上位者

に対しては二人称代名詞で言及することができないが、反対に、下位者に対しては二人称代名詞で言及することができる対称詞の体系である。上位者に対しては二人称代名詞を使うことができないので、「すみません、ちょっと」のように対称詞を省略したり、「先生はどこにお行きになるのですか」のように、「先生」という役割上の対称詞で言及したりする必要がある。多くの方言では目上に対しては二人称代名詞で言及することができない体系をもっている。目上や目下に関係なく単一の二人称代名詞で言及する「単一対称詞」の方言もあるし、また、聞き手が目上か目下かに応じて複数の二人称代名詞を使い分ける「段階対称詞」の方言もある。例えば、永田(一九九六)によると、沖縄本島大里では年上の者にはウンジュ、年下の者にはヤーと年齢の上下に応じて二人称代名詞を使い分けている。印欧語族の人称代名詞では、ポルトガル語のように丁寧な *you* とそうでない *tu* を使い分ける段階対称詞や英語の *you* のように単一対称詞の体系が見られるが、上下対称詞の存在は認められない。しかし、近隣諸国では、日本語のみではなく、朝鮮語においても対称詞として二人称代名詞を目上の聞き手に対して用いることができず、また、敬語が発達し

ていることで有名なインドネシアの地域言語、ジャワ語やスンダ語でも同様に上下対称詞が使われており、日本語の起源を探るのにも重要な問題を提起するのかもしれない。

## 二、資料および調査法

新日本古典文学大系『平家物語』と『保元物語・平治物語・承久記』（岩波書店）をテキストとして用いることにする。ここで使用する「平家物語」は覚一本を底本としているが、「平家物語」は異本が多く待遇表現に限定してもテキストによって異なりが見られることが知られている。その待遇表現の異なりはそれぞれの時代に「平家物語」を書いた作者の登場人物に対する評価が反映したものと考えられているが、作者の評価自身も作者の住んだ時代背景によって左右されているに違いないことが想像される。なお、覚一本は南北朝時代の言語を使用したものと考えられている。さらに、「保元物語」は半井本、「平治物語」は古態本、「承久記」は慈光寺本を底本としている。

当時は身分によって待遇表現が決定されている。桜井

（一九六六）では「今昔物語」で使用される敬語によって身分関係の上下を段階分けしたが、西田（一九七八）ではその分類を基礎に「平家物語」の敬語使用対象を左記のように三グループに分けているが、ここでもこれを活用することにする。

第一群 天皇・院（上皇・法皇）・女院・后・宮な

ど皇族と摂政・関白

第二群 上達部（公卿）すなわち大臣（公）と大納

言・中納言・参議および三位以上の貴族

（以上卿）

第三群 殿上人以下の人々

この論文では話し手と聞き手との関係を親族関係と役割関係と身分関係を考慮に入れることにする。親族関係とは親と子というような血族関係、役割関係とは主君と部下というような主従の関係、身分関係とは院と庶民というような階級的な属性関係を指し、それぞれの関係について、上位と同位と下位という三段階を設定した。しかし、常にこの関係が矛盾しないわけではなく、親族関係では上位であるが身分関係では下位にあるという様な関係も存在することがある。例えば、右大臣公能は太皇太后宮になった娘に対し上位待遇を行い、また、生まれ

てくる孫に対しては上位待遇を行っている。親族関係では娘と孫であり上位であるが、身分関係では天皇家に嫁いだ娘に対して下位になるという関係があり、身分関係の方が親族関係より重要であったことを示している。

会話部分や伝言や書簡で使われている対称詞を調査した結果、四一八例対称詞の使用例が抽出された。対称詞の敬意の度合いを検証するために、聞き手に対して丁寧語「候ふ」を使用しているか等を基準にした。

### 三、調査結果

対称詞は大きく分けて、四つに分類される。一つ目は人称代名詞で、二つ目は役割名で、三つ目は姓名で、四つ目は親族名である。役割とは固定した組織の中での上下関係、たとえば、雇用関係等の上下関係を指し、役割名とは役割に応じた対称詞で、「宰相」、「大納言」のように官職名や、「駿河殿」、「山城殿」のようにそれぞれの受領地名に「殿」を付加した名、「二位殿」のように位階名、「上人」のように職による敬称をさす。各用例文中の対称詞に右線を付けて記す。

#### 三、一、聞き手との関係から見た対称詞

\*親族関係の上位者を

全用例一七例中、息子が父親を待遇する例として、義憲・頼賢・頼仲・為宗・為成・為仲兄弟が判官である父為義に対して、

一「御身ノ為扶カラシモ猿事ニテ、我等ヲモ助サセ給ベキ御支度ニテコソ候へ」(「保元物語」下、為義降

参ノ事)

のように、「御身」が丁寧語とともに三例使われている。

また、親族名称による対称詞が五例使われている。例えば、地の文で十三歳の息子光綱を幼名「寿王冠者」と言及する判官である父光秀に対して、

二「自害ヲエ仕候ハヌニ、父ノ御手ニカケサセ玉へ」

(「承久記」上)

と光綱は言っている。その他でも、重盛の孫六代御前は母藤原成親の娘に対し、

三「母御前にはけふ既にはなれまいらせなまず。今はいかにしても、父のおはしませんが参りたき」

(「平家物語」卷十二、六代)

のように使われており、いずれも幼い子の使用例である。また、判官である胤義が敵になった兄義村を待遇す

る例が八例あり、書簡では、

四 「駿河殿ハ、権太夫ト一ニテ、三浦ニ九七五ニナル

子共三人乍、権太夫ノ前ニテ頸切失給ヘ。……殿ト

胤義ト二人シテ日本国ヲバ知行セン」(「承久記」

上)

のように、「駿河殿」や「殿」で待遇しているが、面と向かつては、

五 「胤義 思ヘバ口惜ヤ。現在、和殿ハ権太夫ガ方人

ニテ」(「承久記」下)

のように、「わたの」で待遇している。

現在の共通語のように親族関係の上位者は親族名称で待遇するという原則はこの時代には一般的でなく、幼少期には親族名称を使っているが、成人した後にはお互いの身分関係を反映した対称詞を使用している。

\* 親族関係の下位者を

全用例三七例使われているが、娘に対して「わ御前」が五例、「なんぢ」が一例使われている。幼き息子に対して、常葉は、

六 「など、をのれらは、ことはりをば知らぬぞ。」(「平治物語」中、常葉落ちらるる事)

のように、「おのれ」を三例、「なんぢ」を一例使っている。

る。少将である成経は三歳の息子に対して、

七 「あはれ、汝七歳にならば、男になして、君へまい

らせんところ思ひつれ」(「平家物語」巻二、阿古屋

之松)

のように、幼少の息子に対して「なんぢ」を使う例が四例ある。例一と同じ場面で、為義は息子達を、

八 「ワ殿原ヲ世ニアラセテ見トテ、カ、ル身ニモ成ツ

ルゾ」(「保元物語」下、為義降参ノ事)

と「わ殿原」で待遇している例が三例ある。例四五のように「御辺」を使う例が二例ある。また、幼児勢多伽に

対し母は、

九 「先童ヲ失ヒテ、和児モ自害セヨ」(「承久記」下)

のように、「わ児」を二例使っている。下野守である義朝は敵になった弟為朝に対しては、

一〇 「八郎ハ、聞ツルニハ不レ似、手コソアバラナリ

ケレ」(「保元物語」中、白河殿攻メ落ス事)

のように、名前で待遇する例が一例あるが、例五四のように「わたの」で待遇する例もある。

聞き手の年齢や身分に応じて親族の下位者に対する対称詞を使い分けている。すなわち、幼少期は子どもや弟というような親族関係に従って「おのれ」や「なんぢ」

で待遇しているが、いったん成人して社会的に位置づけられるとその身分に応じて「御辺」や「わ殿原」で待遇するようになる。

\* 役割関係の上位者を

主君を待遇する例が二八例見つかるが、「なんぢ」で待遇する義仲に対して、郎党今井四郎兼平は、

一一「君はあの松原へいらせ給へ。兼平は此敵ふせき候はん」〔平家物語〕巻九、木曾最期)

のように、「君」が一六例使われている。他に「殿」が二例、さらに、義朝に対してめのとこの鎌田次郎正清は、

一二「コ、ハ大將軍ノ蒐ベキ所ニハ候ハヌゾ」〔保元物語〕中、白河殿へ義朝夜討チニ寄セラルル事)

のように、役割名で待遇する例が五例ある。主君に対して「おのれ」を五例使う例があるが、これは主君のむくろに對して恨みをこめて鞭打つ場面で使われており、特例とみてよい。

役割関係の上位者に対しては、「君」や「殿」や役割名が使われている。反対に、自称詞として「重兼・実盛・貞能」など名を使う用例が目立つ。役割関係の上下差が待遇表現を決定する重要な要因になっている。

\* 役割関係の下位者を

部下を待遇する例が七一例見つかるが、「なんぢ」三七例、「おのれ」一三例、名の呼び捨て一一例、「おのおの」、役割名、「わ僧」各二例、「わとの」、「ものども」各一例がある。なお、義経が部下である那須与一に對して、

一三「射かへせとまねき候。御へんあそばし候なんや」〔平家物語〕巻十一、遠矢)

と「御辺」を「候」という丁寧語とともに使っているが、新日本古典文学大系の注釈では「(与一の属する)甲斐源氏は源氏の支流であるので、敬意を表した言い方をしたのである」とあるが、延慶本では単に「アノ扇仕レ」とのみあり、誤記の可能性が大きいと思われる。

\* 恩恵関係にある者を

主従関係ではないが、恩恵を与えるものと受ける者との間には上下関係が成り立つ。清盛の継母、池禪尼は幼き頼朝の助命をおこなった。池禪尼は頼朝に對して、

一四「其身も又、二度うき目を見んこと、口惜かるべし」〔平治物語〕下、頼朝遠流の事)

と、二例「その身」を使っているのに對し、頼朝は、

一五「父とも母とも、此御方をこそ頼申候はん」〔平

治物語」下、頼朝遠流の事)

と「此御方」を使っている。

\*身分関係の上位者を

一概に身分関係の上位者と言っても、最下層の者から見ると中流層の者も上位者になるため、絶対的基準として聞き手の身分によって分類することにする。第一群に属する人々を待遇する例が二四例見つかるが、すべて「君」で待遇している。例えば、右大臣であった公能は娘であるが入内し太后になった藤原多子に対し、

一六 「もし王子御誕生ありて、君も国母と言はれ、愚老も外祖とあふがるべき瑞相にてもや候らむ」(「平家物語」卷一、二代后)

また、三位入道であった頼政は皇子以仁王に対し、

一七 「君は天照大神四十八世の御末、神武天皇より七十八代にあたらせ給ふ」(「平家物語」卷四、源氏揃)

のようにすべて「君」で待遇している。第二群に属する人々に対しては八例「君」を使っている。また、頼朝は大納言である頼盛に対して、

一八 「故尼御前の御恩を、大納言殿に報じたてまつらん」(「平家物語」卷十、三日平氏)

のように、役職名で待遇する例が六例あり、また、熊谷次郎は敵に対して、

一九 「室山・水島二ヶ度の合戦に高名したりと名のる

越中次郎兵衛はないか、上総五郎兵衛・悪七兵衛はないか、能登殿はましまさぬか」(「平家物語」卷九、一二之懸)

のように、身分の低い侍は「姓+名」呼び捨てで待遇するが、敵でありながら身分の高い能登守教経に対しては、「能登殿」と受領名で待遇する例が二例ある。

第一群に属する人々には「君」を、それ以外の人々には役割名を使っている。

\*身分関係の同位者を

男の話し手から男の聞き手へ「御辺」という対称詞が一七例使われている。義仲は使者を介して頼朝に、

二〇 「なんのゆへに御辺と義仲と中をたがふて、平家にわらはれんと思ふべき」(「平家物語」卷七、清水冠者)

のように、侍は同位の侍に対して「御辺」を使っている。同じく僧には「御房」を二例使っている。身分の低い若侍、山田小三郎是行は同輩の若侍に、

二一 「若殿原に可<sub>レ</sub>申事候。暫ク御馬ヲ止テ、物御覧



候へ」(「保元物語」中、白河殿へ義朝夜討チニ寄セラルル事)

のように、一一例「殿原」が使われている。頼朝は源氏の大名や小名に対して、

二二「けふ九郎が鎌倉へ入るなるに、おのおの用意し給へ」(「平家物語」卷十一、腰越)

のように、「おのおの」が丁寧語とともに七例使われている。侍が同位と思われる敵を待遇する例が七例見つかるが、義仲が一条次郎に対し、

二三「左馬頭兼伊予守朝日の將軍源義仲ぞや。甲斐の一条次郎とこそ聞け。たがひによいかたきぞ」(「平家物語」卷九、木曾最期)

のように「姓+名」が五例、名呼び捨てが二例ある。かつては烏帽子親でありながら、今は敵になっている広綱に対し、光綱は、

二四「アレハ山城殿ノヲハスルカ。光綱ヲバ誰トカ御覧ズル」(「承久記」上)

のように、「役割名+殿」で、また、役割名のみで待遇する例が各一例見つかる。接頭辞「わ」を使った対称詞が、「わたの」、「わきみ」各二例、「わひと」、「わ法師原」各一例が使われている。また、「なんぢ(ら)」七例、

「おのれ(ら)」四例が侍によって同位と思われる敵の侍に対して丁寧語なしに使われている。身分的には同位の聞き手であるが、敵に対してとか憤った場面で使われており、下位待遇と見てよい。

身分関係の同位者に対しては、二人称代名詞の「御辺」、「殿原」、「おのおの」が主に使われている。

\* 身分関係の下位者を

「なんぢ(ら)」が三一例使われているが、話し手と聞き手との間には大きな身分差がある。第一群の話し手が使う例が一五例、第二群の話し手が使う例が六例、それ以外の話し手が使う場合には、聞き手が名もなき庶民や敵である場合である。「おのれ(ら)」が九例使われているが、「なんぢ(ら)」同様話し手と聞き手との間には大きな身分差がある。名の呼び捨ての例が六例ある。「わたの」、「わ男」、「わ君」が各一例使われている。「そこ」が四例、「ここ」が一例使われている。身分関係の下位者に対しては、「なんぢ」や「おのれ」が主に使われている。

三、二、語の機能からみた対称詞  
\* 「君」

身分が高い聞き手に対しての使用例が三五例ある。為義が崇徳上皇に対して、

二五 「只今君<sup>1</sup>ヲ御位ニ付ケマイラセン事、御疑アルベカラズ」(『保元物語』上、新院御所各門門固メノ事付軍評定ノ事)

のように、第一群の聞き手に対して使われる場合がほとんどである。平清盛との争いに負けた源義朝が亡くなった後、その愛妾常葉は清盛の詮議を逃れるため三人の子どもを連れて都落ちした。見ず知らずの村人に一夜の宿を借りる場面であるが、村人は、

二六 「さればこそあやしかりつるが、いかさまにも、たゞ人にてはおはしまさじ。かゝる乱れの世なれば、しかるべき人の北の方にてぞおはすらめ。行衛もしらぬ君の御ゆへに、老衰たる下臈が六波羅へ召出されて、縄をもつき恥をもみて、命をうしなふほどの目にあふとても、追出し奉るべきかは。」(『平治物語』中、常葉落ちらるる事)

と言うが、村人にとっては高貴な常葉に対して「君」を使っている。

また、話し手と聞き手との間には主従関係がある場合にも使われている。例えば、めのとが主君成経に対し

て、

二七 「御ちに参りはじめさぶらひて、君<sup>2</sup>をちのなかより抱きあげまいらせ、月日の重にしたがひて、我身の年のゆく事をば嘆ずして、君のおとなしうならせ給ふ事をのみ、うれしう思ひ奉り」(『平家物語』巻二、少将乞請)

や、主君宗盛に対して、

二八 「廿余年の間、妻子をはぐゝみ、所従をかへりみる事、しかしながら君<sup>3</sup>の御恩ならずといふ事なし」(『平家物語』巻七、福原落)

のように主君に対しての例が一六例ある。

また、例外的に、時子が息子宗盛に、

二九 「主上か様にいつとなく旅だゝせ給たる御事の御心ぐるッしさ、又君<sup>4</sup>をも御代にあらせまいらせばやなンド思ふゆへにこそ、今までもながらへてありつれ」(『平家物語』巻十、請文)

と親族の下位者に使った例が一例ある。原拠した新日本古典文学大系の解釈では、「ここでは『君』は対話の相手である宗盛らを指すものと解せられる」とあるが、延慶本や長門本では、「君達ヲモ世ニアラセバヤ」とあり、問題が残る。

「君」は上位者に対して使うのが一般的な用法であり、一例以外、五三例、丁寧語とともに使われている。丁寧語なしに使われている例は、平家の侍大将越中前司盛俊が源氏の侍猪俣小平六則綱と争った後、勝って上に跨り首を搔こうとする折、則綱の「平家は今は負けが決まっております、私の命を助けてくれれば、盛俊が助命されるようにとりなそう」という言葉に怒って、

三〇「源氏又盛俊にたのまれうども、よも思はじ。にッ

くい君が申やうかな」〔平家物語〕巻九、越中前司最期）

であり、その前には、

三一「わ君は何ものぞ。名のれ、聞かう」〔平家物語〕

巻九、越中前司最期）

と、「わ君」が使われており、例外とみてよいと思われる。延慶本では、この部分は盛俊が助命を頼む話の筋になっており、誤記とみることもできる。「君達」が一例使われているが、侍波多野次郎が主君義朝の幼少の弟達に対して使われている。

「君」がこの当時、どこまで人称代名詞として機能していたか、また、普通名詞としての機能をどこまで残していたかは疑問の残るところである。

三二「君は湊河のしもにて、かたき七騎が中にとりこめられて討たれさせ給ひ候ひぬ」〔平家物語〕巻九、小宰相身投）

や例五〇のように、「主君」の意味で使われる例もあり、もし、「主君」の意味であるなら、ここでの分類では役割名に分類される対称詞である。森野（一九七一）では、平安時代の「君」について、「本来の『君主』『主人』という具体的な意味と有縁性が高く、多分に普通名詞としての性格を払拭しきれずに揺曳させていると思われる」（一七六頁）とある。また、第一群の人々の間ではお互いにどのような対称詞で待遇しあったのであろうか。高倉天皇が関白である藤原基房を「そこ」と待遇する例が一例あるが、丁寧語で待遇しておらず、明らかに上下関係がある。天皇と法皇はお互いにどのように待遇したのであろうか。もし「君」でお互いを待遇しているのであるなら、上位待遇の代名詞と考えるより、「君主」を意味する役割名と考える方が妥当であるが、このような場面は出てこない。

\*「御身」

六例あり、全て丁寧語とともに親族の上位者とか身分の上位者に対して使われている。ロドリゲス（一九五五）

の「日本大文典」では、「敬態で、話しことばと書きことばとに用ゐる」(二六六頁)とある。しかし、

三三 「御身」もいまだつかれさせたまはず。御馬もよはり候はず」(「平家物語」巻九、木曾最期)

のように、「おからだ」という意味で七例使われており、当時は普通名詞の「身」に尊敬を表す接頭辞「御」との複合語から人称代名詞に派生していく過渡期であったように思われる。法印である浄憲は清盛に、

三四 「官位といひ俸禄といひ、御身にとつては悉く満足す」(「平家物語」巻三、法印問答)

また、秀衡は義経に、

三五 「もてなしかしづき奉らば、世の聞えもしかるべからず。又、御身のためもいたはしかるべし」(「平治物語」下、牛若奥州下りの事)

と使っている。

\* 「殿」

七例あり、丁寧語とともに用いられている。樋口次郎兼光は主君義仲に、

三六 「十郎藏人殿こそ、殿のましまさぬ間に、院のきり人して、やうやうに讒奏せられ候なれ」(「平家物語」巻八、室山)

や、僧土佐房は敵の判官義経に、

三七 「まさなうも御誕候ものかな。おしと申さば殿はたすけ給はんずるか」(「平家物語」巻十二、土佐房被斬)

のように、主君や敵でも上位の者に対して使われている。「殿」も人称代名詞というよりもまだ普通名詞として機能していた可能性が高く、ここでの分類では役割名と分類した方がよさそうである。ロドリゲス(一九五五)でも、「それだけが独立に使はれて、主君とか、領地なり家族なり家なりの首長とかを意味する」(五七四頁)とある。山田(一九七四)によると、日蓮聖人遺文には「関白殿ニ対しては殿といはざるが如し。若シ関白殿ニ対して殿といはば、やがて誅滅せられべし」という文章が残されているが、関白のような第一群の人々には「君」が使われていて、「殿」は第三群以下の人々に対して使われている。

\* 「殿原」

一三例あり、「原」は複数を表わす接尾語であり、「殿」と一緒に扱うべきかとも見えるが、「殿」と待遇価が異なり、別に示すことにする。「殿原」は下位者にも使われるが、主に同位の侍に対して使っており、丁寧語

を伴って使われたり使われなかったりする。侍家忠は敵の侍盛次に、

三八 「無益の殿原の雑言かな。われも人も空事言ひつけて雑言せんには、誰かはおとるべき」〔平家物語〕卷十一、嗣信最期)

また、判官光季は家子・郎等に、

三九 「名も惜カラス命ノ惜カラン殿原ハ、事ノ乱レヌ先ニ、何へモ落行給候へ。恨有マジ」〔承久記、上)

と使っている。

\* 「おのおの」

丁寧語が使われたり、使われなかったりして一一例使われている。ロドリゲス(一九五五)では、「複数に用ゐる、丁寧」(二六七頁)とある。斎藤別当は同僚の侍に、四〇 「いざをのをの、木曾殿へ参らふ」〔平家物語〕

卷七、篠原合戦)

また、侍義高が近江守仲兼の家臣の侍に對し、

四一 「いかにをのをのは、誰をかばはんとて軍をばし給ふぞ」〔平家物語〕卷八、法住寺合戦)

のように、侍が同位の複数の侍に七例使われており、また、義経が家臣の侍に對して、

四二 「おのおの船に、簀なともひそ。義経が舟をほん舟として、ともへのかざりをまばれや。」〔平家物語〕卷十一、逆櫓)

のように、家臣に對して四例使われている。

\* 「御辺」

男の聞き手對してのみ使われており、三三例見つかるが、丁寧語を伴って一六例、伴わないで一六例である。ロドリゲス(一九五五)では、「敬態で、書きことばか莊重な話しことばに用ゐる」(二六六頁)とある。まず、僧の文覚が頼朝に、

四三 「御辺の心をみんとて申なシと思ひ給か。御辺に心ざしのふかい色を見給へかし」〔平家物語〕卷

五、福原院宣)

のように、身分の同位者に對して一五例、清盛が左中弁行隆に對し、

四四 「御辺の父の卿は、大小事申あはせし人なれば、をろかに思ひ奉らず」〔平家物語〕卷三、行隆之沙汰)

汰)

のように身分の下位者に對する使用例が四例、家臣に對し一例、また、重盛が息子維盛に、

四五 「御辺は人の子共の中には、勝て見え給ふ也」

〔平家物語〕巻三、無文

のように使われているが、息子でありながら権亮少将であり、「給ふ」という尊敬語とともに用いられている。親族の下位者に使う例が七例あるが、いずれも聞き手の身分が高い。「御辺」の待遇は同位を中心に下位に対してまで広いと思われる。一例上位者に対しての使用例があるが、これは前の則綱が盛俊との争いの場での使用例で誤記ともとれる。

\*「御房」

僧に対して四例使われている。例四三に示した「御辺」で待遇する文意に対して頼朝は、

四六「さもさうず、御房も勅勘の身で人を申ゆるさうどの給ふあてがいやうこそ、おほきにまことしからね」〔平家物語〕巻五、福原院宣

と使っている。

\*「こそあど」

全用例一四例使われており、一一例が丁寧語を伴わないで使われている。まず、高倉天皇は関白である藤原基房に、

四七「そこ<sup>レ</sup>にいかなる目にもあはむは、ひとへにたゞわがあふにてこそあらんずらめ」〔平家物語〕巻

三、法印問答

や、建礼門院が大納言時忠に、

四八「げにも昔の名残とては、そこばかりこそおはしつれ」〔平家物語〕巻十二、平大納言被流

や、清盛の母、池殿は孫重盛に、

四九「もし、そなたにや、腹にあらずとへだて給らんと、世にうらめしく」〔平治物語〕下、頼朝死罪を宥免せらるる事

のように、下位者の者に対し九例使われている。また、今井の下人は主君の兄に対し、

五〇「是はいづちへとてわたらせ給ひ候ぞ。君討たれさせ給ひぬ」〔平家物語〕巻九、樋口被討罰

のように、上位者に対しても使っている。「是は」「これはこれは」のような感嘆詞ともとれるが、対称詞としても解釈できる。

\*「わたの」

表記は、「平家物語」では「わたの」、「保元物語」では「わ殿」、「承久記」では「和殿」と異なるが、「殿」単独では上位者に対する対称詞であるが、「わ」が付くと待遇が低くなることから「わ」は親愛または軽侮の接頭辞と考えられる。二八例あり、丁寧語を伴ったり、

伴わなかったりする。聞き手は男であり、話し手も男である。まず、お互いに判官同士で、胤義は光季に、五一「其事ニ候、判官殿。和殿と胤義トハ若クヨリ一所ニテソダチタレバ」(「承久記」上)と言ひ、その返事に、

五二「此事、光季兼テ知タリ。和殿と能登守殿と二人シテ権大夫ヲ打取テ」(「承久記」上)

のように、自称詞は名前、呼称詞は「判官殿」のように「役割名+殿」と一緒に「和殿」が使われている。また、例四三や例四六で示した同一箇所、文覚が頼朝に、五三「わが身の勅勘をゆりうど申さばこそひが事ならめ。わたのの事申さうはなにかくるしかるべき」(「平家物語」巻五、福原院宣)

と使われ、「御辺」と同一の待遇価であることが分かる。このように同位の者に対して二五例使われている。また、侍、河原太郎は弟次郎に對し、

五四「わ殿は残りともまて、後の証人に立て」(「平家物語」巻九、二度之懸)

のように、親族の下位者や家臣など下位者の者に對しても三例使っている。

\*「わ殿原」

判官である為義が六人の息子、義憲・頼賢・頼仲・為宗・為成・為仲に對し、五五「わ殿原ハ返レ」(「保元物語」下、為義降参ノ事)のように、下位者に對して丁寧語なしに四例使われている。

\*「わ君」

侍高橋長綱は戦場で出会った若年の敵に、

五六「わ君はなにものぞ、名のれ聞かふ」(「平家物語」

巻七、篠原合戦)

のように、敵や息子等の下位者の聞き手に對して四例使っている。

\*「わ僧」

例三七で示した、僧土佐房に對し処刑を迫る判官義經

は、

五七「いかに和僧、記請にはうてたるぞ」(「平家物語」

巻十二、土佐房被斬)

のように、丁寧語なしに僧に對して五例使われている。

\*「わ法師原」

斎藤別当は敵の僧に對し、

五八「さりとて、わ法師原も聞こそしつらめ、日本一

の剛の者、長井斎藤別当実盛とは我事ぞ」(「平治物語

語」中、義朝敗北の事)

のように、一例丁寧語なしに使われている。

\*「わ御前」

女に対する敬称「御前」に接頭辞の「わ」が付いた複合語であるが、「御前」単独では見つからない。一二例あるが、女の聞き手に対して使われている。祇王に対して母は、

五九「まことにわごぜのうらむるもことほりなり」

〔平家物語〕巻一、祇王)

のように、親族の下位者に対してや、また、祇王は知り合いの仏御前に対しても、

六〇「誠にわごぜの是ほどに思給けるとは、夢にだに

知らず」〔平家物語〕巻一、祇王)

のように、同位の女に対しても使っている。

\*「わ男・わ児・わ人ども」

接頭辞「わ」を付加した対称詞が五例、「わ男」は身分の下者、「わ児」は親族の下位者、「わ人ども」は敵の侍に対して、すべて丁寧語なしに使われている。

\*「おのれ(ら)」

三八例あり、すべて丁寧語なしに使われている。「おれら」という対称詞が使われているが、「おのれら」か

らの語形変化として一つに扱った。ロドリゲス(二九五五)では、「敬意を表さない所の莊重な書きことばに多く用ゐる、莊重である」(二六六頁)とある。家臣に対して使用する例が二三例あり、維盛が家臣である侍、斎藤兄弟に、

六一「をのれらが父、斎藤別当、北国へくだし時、

汝らが頼に供せうと言ひしかども」〔平家物語〕巻

七、維盛都落)

のように使われており、「汝」と併用されており、同様な待遇を担っていたことが分かる。身分が下の者に対して九例あり、崇徳上皇が侍である為義・家弘・季能に

六二「命計ハナゾカ扶ザルベキゾと思へバ、ヲノレラ

御身ニ副ジト思食ゾ」〔保元物語〕中、新院如意山

ニ逃ゲ給フ事)

のように、自敬表現「御身」や「思食」と併用して使われており、下位者に対する対称詞であることが分かる。その他、妻に対して一例、息子に対して四例、侍が敵に対して四例使われている。現在では卑罵語であるが当時は下位者に対する対称詞ではあり、現在ほど待遇は低くない。



\*「なんぢ（ら）」

九〇例あり、すべて丁寧語なしに使われている。ロドリゲス（一九五五）では、「書きことばに多く用ゐ、敬意は持たないで、尊大さを表す」（二六六頁）とある。左大臣実定は藏人の藤原経尹に對して、

六三「侍従があまりなごりおしげに思ひたるに、なんぢ歸つて、なにとも言ひてこよ」（「平家物語」巻五、月見）

また、三位の通盛は家臣の滝口時員に、

六四「通盛いかなるとも、なんぢはいのちを捨つべからず」（「平家物語」巻九、小宰相身投）

のように、家臣に對して使う例が三七例見つかる。また、家臣でなくとも、少納言の信西が義朝に對して、

六五「況哉、武勇合戦ノ道ニヲヒテハ、一向汝ガ計タルベシ」（「保元物語」上、主上三条殿に行幸ノ事）

のように、身分の下位者に對する用例が三一例ある。また、神が清盛に、

六六「これは大明神の御使也。汝この劍をもつて、一天四海をしづめ、朝家の御まもりたるべし」（「平家物語」巻三、大塔建立）

のように權威をもって下位者に使う用例や、息子に對し

て六例、娘に對して一例など親族の下位者に對する例が見つかる。また、為朝が敵の侍景綱に、

六七「汝ハ、サテハ合ヌ敵ゴザンナレ」（「保元物語」中、白河殿へ義朝夜討チニ寄セラルル事）

のように、身分が低いと思われる敵にも七例使われている。

\*親族名

「父」、「母」、「母御前」、「兄」という親族名が六例使われている。現在では、親族呼称と親族名称は区別され、他人に對しては、「父が参ります」という親族名称が使われるが、対称詞としては、「おとうさん」という親族呼称が使われる。この時代では、「母御前」は現在の親族呼称に当たるものであろうか。幼少の子どもの使用例がほとんどで親族名を一般成人が使うことはなかった可能性がある。

\*役割名（+殿）

三七例見つかるが、そのうち「殿」をつけた役割名一八例は常に丁寧語とともに用いられている。また、義時は長男武藏守泰時や二男式部承朝時に對し、六八「武藏守・式部丞ハ、トクシテ下ルベシ」（「承久記」下）

のように、息子でありながら公的な指示を行う書面では役割名で待遇している。恵源太義平は寝返った源兵庫頭頼政に対し、

六九 「まさなき兵庫頭が翔かな。源家にも名をしらるゝほどの者が、二心あるやうやはある。義平が目の前をば、一度もわたすまじき物を」〔平治物語〕中、義朝六波羅に寄せらるる事

のように、役割名で呼び捨てている。一般的には役割名で待遇する同位の者には丁寧語をつけて使っている。

\* 姓+殿

身分の同位の侍同士で、

七〇 「梶原殿の申されけるにも、御ゆるされないとうけたまはる間、まして高綱が申すとも」〔平家物語〕巻九、生ズキノ沙汰

七一 「いしう申させ給ふ田代殿かな。さらばやがてよせさせ給へ」〔平家物語〕巻九、三草合戦

のように、お互いを「姓+殿」で待遇する例が五例見かる。

\* 姓+名

侍が身分の同位の敵の侍に対して戦場では、

七二 「間野次郎左衛門ト奉レ見ハ僻事カ」〔承久記〕

(上)

七三 「アレハ玄蕃太郎ト奉レ見ハ僻事カ」〔承久記〕下

のように、五例用いている。聞き手が身分が同位の侍である場合、「姓+殿」か「姓+名」で待遇するかは、味方か敵かによって決まるように見える。

\* 姓呼び捨て

一例であるが、畑山次郎は烏帽子子である大串重親を、「わ殿腹」と呼び、

七四 「たそ」ととへば、「重親」とこたふ。「いかに大串か」。「さん候」。〔平家物語〕巻九、宇治川先陣

のように、畑山は丁寧語なしに、それに対して「候」で答えるように、親しいが明らかに下位者に対して姓呼び捨てで待遇している。

\* 名呼び捨て

二五例見つかるが、全て丁寧語なしに使われている。

前右大将の宗盛が家臣の滝口競に対して、

七五 「競はあるか」〔平家物語〕巻四、競

また、中納言の知盛が家臣の阿波民部重能に対して、

七六 「重能参れ」〔平家物語〕巻十一、鶏合 壇浦合

戦

のように、家臣に対して一一例使われている。

また、高倉天皇は聞き手が前右大将であった宗盛でも、七七「宗盛ともかうもはからへ」〔平家物語〕巻三、

#### 城南之離宮

のように、身分が下の者に六例使っている。親族の下位者にも二例使われている。森野（一九七一）では、平安時代においては実名敬避の習俗があり、「枕草子」では実名で称呼されるのは受領階級以下に集中しており、よほど目下でないと思われなかったとあり、軍記物語においても下位待遇である。

#### 四、まとめ

\* 永田（二〇〇一）では、軍記物語で使われている第三者待遇表現を序列敬語と名付けた。すなわち、序列に応じて第三者を待遇する敬語体系であり、序列の高い聞き手に対してはより序列の低い第三者はたとえ話し手の目上であろうとも尊敬待遇をしない敬語体系と考えた。対称詞の体系においても序列関係が重要で、自分の息子であろうとも成人し身分が高くなれば身分に応じた対称詞を、また、息子も親を親族名称でなく身分に応じた対称

詞で待遇している。現在のように親族の目上は親族名でしか待遇できないという共通語の原則は、この時代には一般的でない。幼少の者のみが親族名を使っている。成人した後には、親族の目上を身分に応じた対称詞で待遇している。対称詞の体系においても序列関係が重要で、上下対称詞であると考えられる。すなわち、上位者には人称代名詞を使って待遇することができず、下位者や同位者に対してのみ人称代名詞を使うことができる体系である。下位者に対しては、「なんぢ」や「おのれ」のような和語系統の人称代名詞が安定して使われているが、反対に言うと、下位者には人称代名詞を使ってよいという体系である。同位者に対しては「御辺」や「御房」のような「御」を付加した漢語系統の人称代名詞が使われている。

\* 上位者に対して唯一用いられている対称詞として「君」がある。「君」は第一群の聞き手のように聞き手の身分が非常に高い場合にも、聞き手の身分がそのように高くなっても主従関係のあるものに対してでも使われている。「君主」とか「主君」という意味で使われており、この当時、どこまで人称代名詞として機能していたか、また、普通名詞としての機能をどこまで残していたかは

疑問の残るところである。過去の文献では代名詞として扱っているが、「奏す」「敬す」「御幸」のように帝や后等の身分の人に対してのみもちいられる敬語を玉上琢弥氏が「絶対敬語」と定義するように、もし、「君」が「君主」とか「主君」に対してのみ用いられる対称詞であるならば、それはここでは役割名と定義している対称詞であり、軍記物語で使われている対称詞の体系は上下対称詞と見てよいと思われる。

\* 同位または上位者の聞き手を待遇する場合に、明示的に役割名や姓名で呼ぶ場合があるが、上位者に対しては、官職名や受領地名に殿を付加して呼び、同位者には姓で、下位者には名で呼んでいる。特に、名を呼び捨てる場合には明らかに役割や身分が低い聞き手に限定されており、実名忌避の習俗が存続していたことが分かる。渡辺（一九九八）によると、穂積（一九二六）によって知られるように実名の敬避の規範意識が古くから存在し、「私たち日本人には、下位の者が上位の者を呼称する場合、その名前を敬避し、代わりにその親族名称、ポスト名、職業名などなどを使って呼称しようとする規範意識が強く存在する」（一一頁）と言うように、それが現在まで続いていると考えており、さらに、辻村

（一九七一）によると、諱として日本語の敬語の起源と通じる可能性が論じられている。

\* 「わ殿（原）」「わ君」「わ御前」のように、接頭辞「わ」を付加することによって親しみを表し、本来は同位者に対する待遇表現が下位待遇表現に低下している様子が見られる。

\* 「承久記」には宣旨を受けて名前を呼ぶ場面があるが、一、河内判官秀澄のように役割名＋名呼び捨て、二、斎藤左衛門のように姓＋名呼び捨て、三、下総守のように役割名、四、上田殿のように姓＋殿の四種類あるが、身分による使い分けがあるのであろうか。

### 参考文献

伊藤一重（二〇〇七）「平家物語における人を示す表現について——覚一本・対称——」（小久保宗明編『日本語日本文学論集』笠間書院）

岡村和江（一九八二）「軍記物語の語彙——「金刀比羅本保元物語」の一・二人称をめぐって——」（『講座日本語学』五 現代語彙との史的対照）明治書院

桜井光昭（一九六六）『今昔物語の語法の研究』明治書院  
辻村敏樹（一九七一）「敬語史の方法と問題」（『講座国語史』五

敬語史』大修館書店)

西田直敏(一九七八)『平家物語の文体論的研究』明治書院

国立国語研究所(一九七九)『各地方言親族語彙の言語社会学的研究(一)』(秀英出版)

鈴木孝夫(一九七三)『ことばと文化』(岩波新書)

永田高志(一九九六)『地域語の生態シリーズ琉球篇 琉球で

生まれた共通語』(おうふう)

永田高志(二〇〇一)『第三者待遇表現史の研究』(和泉書院)

永田高志(二〇〇六)『明治前期東京語の対称詞——散切物を通じて』『国語国文』七五一六

永田高志(二〇〇八a)『国定国語教科書の対称詞』『国語と国文学』八五—三

永田高志(二〇〇八b)『明治後期・大正期東京語の対称詞』(近畿大学日本文化研究所編『日本文化の鉱脈——茫洋と閃光と』風媒社)

永田高志(二〇〇九a)『総合雑誌『太陽』に見る対称詞』『国語と国文学』八六—九

永田高志(二〇〇九b)『捷解新語の対称詞』『日本近代語研究5』ひつじ書房)

穂積陳重(一九二六)『美名敬避俗研究』(帝国学士院)

森野宗明(一九七二)『古代の敬語Ⅱ』(『講座国語史五 敬語

史』大修館書店)

山田 巖(一九七四)『中世の敬語概観』(『敬語講座3 中世の敬語』明治書院)

ロドリゲス(一九五五)『日本大文典』(土井忠生訳註、三省堂)

渡辺友左(一九九八)『呼称』という論点』(『日本語学』一七一—一九)